

夜明け

キリストの臨在の使徒



ドーンマガジン

2026年3月号

目次

特集記事	2
血による救い	2
聖書研究	16
二つの大いなる戒め	16
敬虔のために鍛錬する	19
他者への与え	22
キリスト・イエスにあって一つとなる	25
神の王国を待ち望む	28
キリスト教の生活と教義	31
奉仕の報い	31

聖書と一緒に読み進めよう！

血による救い

「彼らは血を取って、それを[過越の]子羊を食べる家の二つの戸口と鴨居に塗らなければならない。」

出エジプト記12章7節

3月と4月の春の季節を迎えるにあたり、世界中のクリスチャンは主イエス・キリストの死と復活を特別に記念するために集まります。ほぼ同じ時期に、ユダヤ教徒も過越の祭りを祝うために集まります。

それぞれの集団は、自らの暦と長く受け継がれてきた伝統に基づいて、これらの宗教的行事を行う正確な時期を決定します。時にはこれらの行事が数日しか離れていないこともあれば、数週間離れていることもあります。聖書の記録によれば、イスラエルの過越の小羊は、彼らの月の14日目、アビブ（後にニサンと呼ばれる）に屠られました。

（申命記16:1、ネヘミヤ記2:1）。これは私たちの暦では、年によって3月または4月に相当します。

キリスト教徒もユダヤ教徒もこの時期にこれらの重要な出来事を祝いますが、罪に病んだ人類の救い主として死んだイエスの死と復活の真の意味と重要性を理解する者はほとんどいません。ユダヤ教の過越祭の完全な意味を理解する者もまた稀です。使徒ペテロは、多くの人々が神の深遠な真理を理解する目が曇っていると説明しました。「神

は、その神聖な力によって、敬虔な生活に必要なすべてのものを私たちに与えてくださいました。私たちは、驚くべき栄光と美しさをもって私たちを御自身のもとに招いてくださった方、すなわちイエス・キリスト（ ）を知ることで、これらすべてを受け取ったのです。...しかし、このように成長しない人々は、近視眼的で盲目であり、かつて古い罪から清められたことを忘れていています。」（ペテロの手紙二 1:3,9）

神の教え

この聖句が記された当時、イスラエルの民はエジプトに捕らえられていた。時が満ちると、神はイスラエル人に、屠られた過越の小羊の血を「家の両側の柱と、戸口の上の楣に塗る」よう命じられた。また、子羊を焼いて、種入れぬパンと苦菜とともに食べるよう命じられた（出エジプト記 12:8）。この文脈は、神がイスラエル人に与えた特別な指示に関連する他の重要な詳細と視点も提供している。

「主はモーセとアロンにこう命じられた。『今からこの月を、あなたがたの年の初めとする。イスラエルの全会衆に告げよ。この月の十日に、各家族は犠牲として子羊か子山羊を選び、一世帯ごとに一頭ずつ用意せよ。家族が少なくても一頭を食べきれない場合は、近隣の家族と分け合え。各家族の規模と食べられる量に応じて分けなさい。選ぶ動物は、一歳の雄の子羊か子山羊で、欠点のないものでなければならない。この選ばれた動物を、この最初の月の十四日の夕方まで、特に大切に扱いなさい。そして、イスラエルの共同体全体が、

夕暮れ時にその子羊または子山羊を屠らなければならない。」出エジプト記12:1-6

屠られた子羊

これらの明確な指示には、多くの重要な象徴性が込められている。例えば、「エジプトの地」への言及は、サタンが現在、地とその民を支配していることを指し示している。「この世の神 [サタン] は、不信者の心を盲目にし、神の御姿であるキリストの栄光の福音の光を見えないようにしている。」（コリント人への第二の手紙4:4）

「月の初め」は過越祭を祝う正確な日を計算する基準であった。春分点に最も近い新月がユダヤ暦最初の月アビブの始まりを示した。犠牲の羊は最初の月の「十日目」に選ばれることになっていた。これは、世界の罪を取り除く「神の小羊」として、ゼカリヤの預言を成就するために将来エルサレムに来られるイエスを予表していた。（マタイ21:1-9、ヨハネ1:29、ゼカリヤ9:9）さらに出エジプト記12章の記述によれば、小羊は一歳の雄で、傷のないものでなければならなかった。これは将来の傷のない「神の小羊」としてのイエスの完全性を表していた（ペテロ第一1:19）。過越の小羊は「その月の十四日」に屠られ、その夜に食べられた。過越の祭り（無酵パンの祭りとも呼ばれる）は翌日から始まり七日間続いた。出エジプト記12:15-17

初子—血の下に

これらの指示に加え、こう記されている。「今夜、わたしはエジプトの国を巡り、エジプトの地のすべての初子を、人と獣とを問わず打つ。またエジプトの神々すべてに裁きを下す。わたしは主である。血は、あなたがたが住む家々のしるしとなる。わたしがその血を見るとき、あなたがたを過ぎ越す。わたしがエジプトの地を打つとき、滅ぼす災いがあなたがたに及ばない。この日はあなたがたにとって記念の日となる。代々、主への祭りとして守り、永遠の定めとして祝うのだ。」出エジプト記12:12-14

これらの聖句では、エジプトの地を「夜」に通過することが言及されている。これは、ペンテコステ以来神の民が通過してきた罪と死の暗い夜を表している。（コロサイ人への手紙 1:13; ペテロの手紙一 2:9）「初子」は「天に記された初子の教会」を象徴する。彼らは小羊の血の下にあり、キリストの御国の天的な段階に与ろうと努めている。ヘブル人への手紙12:23

イスラエルの長子は後に、神に属すると数えられたレビ族全体と取り替えられた。「主はモーセに言われた。『見よ、わたしはイスラエル人の中からレビ族を選び、イスラエルの民のすべての長子の代わりに仕えさせる。レビ人はわたしのものである。すべての初子はわたしのものであるからだ。わたしがエジプト人のすべての初子を打った日に、わたしはイスラエルのすべての初子、すなわち人と家畜とを、わたしのものとした。彼らは

わたしのものである。わたしは主である。」民数記3:11-13

記念または追憶

血は命を象徴し、過越の小羊が屠られた時、それは犠牲に捧げられた命を表した（レビ記17:11）。犠牲の小羊の血は、神の御心に従い、数世紀後に罪に病んだ人類の家族のために塗られることになる、我らの主イエスの尊い血を表すために用いられた。私たちの主の犠牲の血こそが、アダムとエバが神の律法に背いたために下された死の宣告から救われる唯一の手段である。ペテロの手紙第一1:18,19; ヨハネの黙示録 1:5

神はイスラエルの民に、この出来事の特定の時を覚え、毎年それを記念として守るよう命じられました。「この日はあなたがたにとって記念の日となる」（出エジプト記12:14）。これは、イエスと弟子たちが上階の部屋に集まった時に制定された、より偉大な記念式を象徴するものです。その時、イエスは弟子たちに、ご自身の体を表すパンと、ご自身の犠牲の血を示す杯を分かち合うよう求められました。そして「これを私の記念として行いなさい」と告げられました（コリント人への第一の手紙11:23-26）。数時間後、イエスは世の罪のために死なれるのでした。

ルカの記述を引用すると、こう記されている：

「[イエスは]パンを取り、感謝をささげてから、それを裂いて[弟子たちに]与え、言われた。『これは、あなたがたのためにささげられるわたしのからだである。わたしの記念として、これをしなさい

い。』また、夕食の後、同じように杯を取って言われた。『この杯は、あなたがたのために注がれるわたしの血による新しい契約である。』」ルカによる福音書22章19節、20節

災い

神の定めた時の時計が鳴り響いた時、それはイスラエル人がエジプトの奴隷状態から解放される時を告げた。彼らが長年待ち望んだ救いが訪れたのである。しかしファラオとその役人たちは彼らを解放しようとはしなかった。彼らはイスラエル人を約束の地カナンへ行くことを許そうとしなかった。主は次々と様々な災いをエジプトの民に下したが、ファラオが慈悲を求め、守るつもりもない約束をした時には彼らを救った。出エジプト記7章から10章を参照。

ついに神の僕モーセは第十の最終的な災いを告げた。エジプトの全ての家の長子が大いなる災いに遭い、一夜にして皆死ぬという。最も貧しい農民の家からファラオの宮殿に至るまで、エジプト全土に深い悲嘆が広がり、彼らは喜んでイスラエル人を去らせるだろう。出エジプト記11:1-8

モーセの宣告通り、「その夜、真夜中に、主はエジプトの地のすべての初子を打たれた。ファラオの王座に座るファラオの初子から、牢獄の囚人の初子まで。家畜の初子までもが殺された。ファラオとすべての役人、エジプトの民は夜中に目を覚まし、エジプト全土に悲鳴が響き渡った。死者が一人も出なかった家などなかった。ファラオは夜のうちにモーセとアロンを呼び寄せた。「出て行

け！」と命じた。「わが民を去らせよ。残りのイスラエル人も連れて行け！」 お前たちの願い通り、主を礼拝しに行け。お前たちが言った通り、家畜も連れて行け。行け、だが去る際には私を祝福せよ。」エジプト人たちは皆、イスラエルの民に「急いでこの地から出て行け。我々も皆死ぬだろう」と言い、彼らを急かした。出エジプト記 12:29-33

旅の準備

出エジプト記7章から10章に記されているように、最初の三つの災いはエジプト全土に共通して降りかかりました。イスラエル人が住んでいた地域も例外ではありませんでした。しかし、次の六つの災いはエジプト人が住む地域のみに影響を及ぼしました。第十の災い、すなわち最後の災いは、血の印の下にあったイスラエル人に割り当てられた地域を含む、エジプト全土に共通して降りかかると宣言されました。

イスラエルの子らは、犠牲の羊を用意し、その血を戸口の両脇と鴨居に塗ることで、神の御心への信仰と従順を示すよう命じられていた。その肉は苦い野菜と種入れぬパンと共に、その夜のうちに食べられねばならなかった。彼らは、家の門柱と鴨居に塗られた子羊の血によって「血の下に留まる」ことで、神がエジプトの初子を死で打たれる災いに巻き込まれないと完全に信じていた。子羊を食べた者たちは、杖を手に旅支度を整え、神がエジプト人に彼らを去らせる意志を持たせると期待して待機した。出エジプト記12:7-13

律法の特徴

イスラエル人は、モーセを通して神から与えられたこの過越の祭りを毎年覚えて祝うよう命じられた。これは彼らの最も重要な国家的記念祭の一つであり、この古代の慣習の意味に対する敬意の表れとして、今も世界中のユダヤ人によって祝われている。

モーセの律法の多くの特徴は、神の定められた時と適切な順序において、地上のすべての家族に注がれる様々な祝福を予表するよう、神によって設計された。過越の祭りの場合、子羊の死は完全な人間としてのイエスの死を予表した。子羊の血を振りかける行為は、罪と死の夜に過ぎ越された者たちへ、イエスの身代金の犠牲の功績が帰せられることを象徴した。イスラエル人の場合と同様に、この「初子」の階級こそが、子羊の流された血の恵みを最初に受ける者たちである。（ヨハネの手紙第一 1:7；エペソ人への手紙 1:3-7）。信仰の目をもってイエスがまことに神の小羊であると見る者は幸いである。イエスの血によって、アダムの罪の帳消しが可能となった。それはアダムの罰、すなわち全世界が神の恵みを失い、死の神の宣告下に置かれたその罰の支払いを伴うものであった。

この死の呪いとそれに伴う悲しみと苦痛の苦しみを取り除く前に、正義の満足が提供される必要があった。聖書が宣言するように：「それゆえ、一人の（アダムの）罪によって、すべての人が罪と定められて裁きを受けたように、一人の（イエスの）義によって、すべての人が義と認められてい

のちを得るといふ賜物を受けたのである。」ローマ5:18

初穂

神の聖霊に動かされた啓示者ヨハネは記した。

「見よ、小羊がシオンの山に立っておられ、その額には御父の名と御子自身の名が記された百四十四万人が共に立っていた。すると天から、大水の音のようであり、また大いなる雷鳴のようであり、また豎琴を弾く者の音のような声が聞こえた。彼らは玉座の前と、四つの生き物の前と、長老たちの前で、新しい歌を歌った。この歌を覚えることができたのは、地から買い取られた百四十四千人のみであった。彼らは女に汚されなかった者たちである。彼らは身を清く保ったからである。彼らは小羊がどこへ行くにも従う者たちである。彼らは、神と小羊への初穂として、人々の中から買い取られた者たちである。」黙示録14:1-4

この神の靈感を受けた言葉は、栄光に輝くキリスト、すなわち頭と体とを「神と小羊への初穂」として指し示している。これは、愛する天の父の究極の計画と目的において「後の実」も存在することを示唆している。まさにその通りである。神のご計画は、イスラエルの長子だけでなく、すべての子供たちを救うことだった。彼らは国家として、将来の約束の地—回復された完全な地—において神との調和に入り、永遠の命を与えられる機会を与えられる全人類を代表する存在であった。

こうしてイスラエルの民全体は、モーセを通して主によって奇跡的に救い出された。彼らはモーセ

に導かれ、風と潮を支配する神の力によって特別に用意された紅海の海峡を渡る道を進んだ（出エジプト記14:21-30）。一人残らず救われた。この驚くべき出来事は、全世界がサタンの力から最終的に救い出されることを示している。すべての人々は、キリストが将来地上を統治する支配のもとで確立される義の法に調和する機会を与えられる。まさに、使徒パウロが記した言葉を繰り返すことができる。「キリスト・イエスは、すべての人のための身代金としてご自身をささげられた。それは、定められた時に証しされるためである。」
（テモテへの手紙一 2:6）

二つの成就

死からの救いは、神の死の天使が通り過ぎる時、イスラエルの長子たちが小羊の血の下に留まることに依存していた。血の下にいて死にさらされていたのは彼らだけだった。過越の図に示されているように、その夜、彼らは皆救われた。このように、イスラエルの長子たちは小羊の血の振りかけの直接の受益者であった。

現在のキリスト教時代においても、イエスの足跡をたどる者たちは血の下にいる。彼らはイエスの血の功績を受け入れ、その保護の下にある（ヨハネの手紙一 1:7）。彼らは世に先立って召された。理解の目が開かれ、自らの罪と束縛の状態、そして救いが必要なことを悟ったのである。（エペソ 1:18）彼らは神の驚くべき恵みに応え、完全な献身をもって自らの命を神に捧げた。（ローマ12:1）
「神の小羊」の流された血への信仰ゆえに、彼ら

は「父と、その子イエス・キリストとの交わり」を持っている。(1ヨハネ1:3)

使徒パウロは、現世における献身がイエスの死へのバプテスマを意味すると説明している。「あなたがたは知らないのか。私たち多くの者がイエス・キリストにバプテスマを受けたのは、彼の死にバプテスマを受けたのである。それゆえ、私たちはバプテスマによって彼の死に葬られたのである。それは、キリストが父の栄光によって死者の中からよみがえられたように、私たちもまた、新しいいのちを歩むためである。もし私たちが彼の死の姿に植えられたなら、彼の復活の姿にもあずかるのです。」ローマ人への手紙6:3-5

神に命を捧げた者たちが、今もなお尊い血の注ぎの下に留まり続けることは、最も重要なことです。この恵みの状態から離れることは、愛する天の父の憐れみを軽んじることを意味する。それは、神の良さを理解せず、イエスの血の救いの力に与ることを感謝していないことを示すのである。「真理の知識を受けた後で、故意に罪を犯すなら、もはや罪のためのいけにえは残されていない。」へブル人への手紙10:26

全世界の救い

「初子たちの教会」の成員は、世界より先にイエスの血の功績を受け取っています。キリストは「今や天そのものに入り、私たちのために神の御前に現れておられる」(へブル9:24)。教会が完成する時、私たちの救い主の血の功績、すなわち価値が、全人類に利用可能となるのです。イエスは

言われた。「わたしは良い羊飼いです。わたしの羊を知っており、わたしの羊もわたしを知っている。父がわたしを知っておられるように、わたしも父を知っている。わたしは羊のために命を捨てる。また、この囲いにはいない別の羊がいる。彼らも連れて来なければならない。彼らはわたしの声に聞き従う。こうして一つの囲い、一つの羊飼いとなるのである。」ヨハネによる福音書10:14-16

エジプトの地で起こった第二の偉大な恵みは、モーセに導かれて紅海を渡ったイスラエル民族全体の救出であった。この驚くべき出来事は、罪と死の束縛から全人類が究極的に回復されることを象徴している。約束された祝福は、キリストの王国の確立と新約の条件のもとで世界に与えられる。

(エレミヤ31:31-34) その時、義に従い、より偉大なモーセである主イエスに従うことを望む者すべてに、アダムの罪によって失われたいのちの権利が与えられる。申命記18:15-19; 使徒3:20-25

罪と死の長い夜は過ぎ去り、救いの輝かしい朝が訪れる。(詩篇30:5) 頭であり体であるキリストが、イスラエル全体、神の民すべてを導き出し、救い出す。その時、すべての人は神の御心を知り、それを畏れ敬い、尊び、喜んで従うようになる。使徒15:16,17; ローマ11:26-36

私たちの過越のキリスト

使徒パウロがコリントの兄弟たちに手紙を書いたとき、こう告げた。「古いパン種を取り除きなさい。あなたがたは、すでにパン種のないものとなっているのだから、新しい生地となるためです。私たちの過越の羊であるキリストが、すでに犠牲にされたのです。ですから、古いパン種、すなわち悪意と悪のパン種ではなく、誠実と真実のパン種をもって、この祭りを祝いましょう。」（コリント人への第一の手紙5:7,8）

この聖句において、使徒は天に名を書かれた「初子たちの教会」（ヘブル12:23）に語りかけている。彼は彼らに、悪意と悪の酵母に象徴されるあらゆる罪と不義から自らを清めるよう戒めた。代わりに、彼らは無酵のパンに与ることで示されるように、義と真理を求めなければならなかった。

象徴的な子羊を食べることで、私たちはキリストの功績を自らのものとする。また、私たちの力の及ぶ限りでキリストを「身にまとう」ことにより、私たちはキリストの栄光ある姿と性質へと変えられていくのである（ローマ12:2; 13:14; ガラテヤ3:27）。私たちは、ユダヤ人が過越の小羊を食べたように、キリストを糧とするのです（ ）。イスラエル人の食欲を刺激し助けた苦い野菜は、私たちの苦い経験と試練を象徴していました。これらは、私たちの情愛を地上のものから離す助けとして与えられ、真理の小羊と種入れぬパンをますます貪り食う食欲を私たちに与えるのです。

この世に「私たちの住むべき都はない」。むしろ旅人であり寄留者として、杖を手に天のカナンの地への旅路に備えて進みます（ヘブル13:14、ペテロ第一2:11）。愛する天の父が、長子たる教会のために備えておられるすべての栄光の祝福は、「神の小羊」とその救いの血の功績を忠実に受け入れた者たちに与えられる。エペソ人への手紙1:3-7

祭りを守りましょう

まもなく、多くの人々が再び集い、偉大な過越の小羊としてのイエスの死を記念する。今年もこの祭りを守るにあたり、私たちのために流されたイエスの尊い血を喜び祝おう。やがてこの血の証し世界に示される時が来るのだ。「さて、永遠の契約の血によって、大いなる羊飼いである私たちの主イエスを死者の中からよみがえらせた平和の神が、あなたがたを、御心に適うことを行うために、あらゆる良いわざにおいて完全にしてくださいように。イエス・キリストによって、その御目に喜ばれることをあなたがたのうちに働かせてくださいように。栄光が、永遠に、また永遠に、キリストにあるように。アーメン。」ヘブル人への手紙13:20,21

3月1日のレッスン

二つの大いなる戒め

鍵となる聖句：「すると、律法学者の一人が来て、彼らが議論しているのを聞き、イエスが彼らにうまく答えたのを知って、『すべての戒めの中で、一番大切な戒めはどれですか』と尋ねた。」

マルコによる福音書 12:28

聖句抜粋：

マルコによる福音書12章28-34節

今日の学びに至るまで、イエスは神殿の庭で祭司長や長老たちに囲まれ、どんな権威をもって教えているのかと問いただされました（マルコ 11:27,28）。それに対してイエスは、悪しき農夫たちのたとえを語られました。そこでは、悪しき管理人たちが地主の息子を殺してしまうのです。このたとえを通して、イエスはユダヤの宗教指導者たちが、民に対する権力と権威を維持するために神の御子を殺す者たちであると明確に示された。マタイの記録にあるように、イエスはこう応答された。「神の国はあなたがたから取り上げられ、その実を結ぶ国民に与えられるであろう。」マタイ 21:43

これに激怒したファリサイ派やユダヤの指導者たちは、様々な質問でイエスを陥れようと試みた。ファリサイ派は「カイザルに税を納めるのは律法にかなっているか」と問いただし、主は「カイザ

ルのものはカイザルに、神のものは神に返しなさい」と答えた（マルコ12:13-17）。次にサドカイ派が尋ねたのは、七人の兄弟が同じ女性と結婚した場合、御国では誰がその妻の夫となるかということだった。彼らは死者の復活を信じていなかったため、イエスはこう答えた。「あなたがたの間違ひは、聖書を知らず、神の力も知らないことにある。」（マルコ12:24）

イエスの答えに感銘を受けた「律法学者」が、おそらく真摯な気持ちで、私たちのキー・バースに記されている質問をした。「イエスは答えて言われた。『最も重要な戒めはこれである。聞け、イスラエルよ。私たちの神、主は唯一の神である。心を尽くし、魂を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。』」（マルコ12:29,30）。申命記6:4,5から直接引用されたこのイエスの言葉は、なんと素晴らしく包括的なものであろうか。

イエスは律法学者の問いを超え、第二の戒めが第一の戒めと関連していることを宣言された。すなわち「あなたの隣人をあなた自身のように愛しなさい」である。（マルコ12:31）ここでもイエスは旧約聖書（レビ記19:18）を引用された。わずか数語でどれほど多くのことが語られていることか。聖書は、被造物の福祉のために備えられた御業によって示される、憐れみと慈しみと愛の神を明らかにする。神の言葉はまた、被造物に報いる愛を勧告し、創造主と隣人に対する高い基準を提示している。

この神の律法は、その最も深い意味において未だ完全に理解されてはいない。この基準への限定的なアプローチは、孔子の教えに見いだせるかもしれない。すなわち「人にされたくないことを、人にしてはならない」という趣旨である。しかし、これを聖書と比較すると、なんと対照的なことか！前者は単なる否定的な命題に過ぎないが、後者は積極的な命題である。「あなたの隣人をあなた自身のように愛しなさい」。

確かに、神の律法には神聖なる印を押す要素が数多く存在する。もし人々がこの二つの偉大な律法に従って生きる能力と意志を持てば、この世はなんと美しいものになるだろう。誰もが心を尽くし、魂を尽くして天の父を愛し、すべての人々が隣人を己のように愛し、機会あるごとに彼らに仕えようとする。それがまさに樂園である。感謝すべきことに、メシアの王国が確立される時、この世がまさにそうなることが約束されているのだ。

3月8日のレッスン

敬虔のために鍛錬する

鍵となる聖句：「敬虔のために自分を鍛えなさい。なぜなら、肉体の鍛錬は少しの益しかないが、敬虔はすべてのことに益となるからです。それは、今この世の生活にも、また来るべき世の生活にも、約束があるからです。」

テモテへの手紙第一 4:7,8

聖句抜粋：

テモテへの手紙一 4:7-16

パウロがテモテに宛てた最初の手紙の中で、使徒は彼を「信仰におけるわが子」と呼んでいます（テモテへの手紙一 1:1,2）。パウロが最初にテモテを牧会職に召した時、テモテは自信に欠けていたという証拠があります。その後、使徒はテモテの母と祖母が示した信仰を彼に思い起こさせ、また彼が「恐れに支配される」ことがないようにと励ましました（テモテへの手紙二 1:5-7）。別の機会に、パウロはテモテが訪問した際、コリントの信徒たちが彼を威圧しないよう求めています。これはテモテの不安定さを認識していたことを示しています（コリント人への第一の手紙16:10）。今回の聖句で、使徒はテモテに「若さゆえに誰にも軽んじられてはならない」（テモテへの第一の手紙4:12）と勧めています。パウロのテモテへの励ましは個人的な性質のものですが、教会の各メンバーにも適用できます。

本節の鍵となる箇所、パウロはテモテに肉体的な鍛錬と敬虔の対比を考えるよう促している。ある訳では「肉体的な鍛錬には多少の価値があるが、敬虔はすべてのことに価値があり、現世と来世の両方において約束を秘めている」と記されている。多くの研究が、運動の心理的効果——うつや不安の症状軽減、ストレスレベル低下、自尊心と自信の向上——を示している。パウロは肉体的な訓練を時間の無駄として否定せず、むしろ価値あるものと称賛しています。使徒は別の箇所で、私たちの体は神から与えられた聖霊の宮であり、キリストの尊い血によって買い取られたものであると述べています。したがって私たちは、神の奉仕にふさわしい状態を保つことで神を栄光に帰すべきです。コリント人への第一の手紙**6:19,20**

身体的運動の実用的な価値を認めた後、パウロは直ちに「敬虔」を実践することの優位性を強調する。彼はテモテに牧会上の義務を思い出させるが、それはテモテがそれを忘れてたり怠ったりしたからではなく、この道を歩み続けるよう励ますためである。彼はテモテに、教会に対してあらゆる不敬虔で神話的な教えを拒絶し、真の敬虔の実践を勧めるよう命じる。兄弟たちに神の真実を認めさせ、神のメッセージの受け入れやすさを悟らせるよう励ますべきである。ティモシーは信者たちに、キリストのために労苦し、侮辱を受ける特権を思い出させるべきである。彼らに「すべての人の救い主である生ける神を信頼する」ことを教えるべきである。テモテへの手紙一 **4:7-10**

パウロは若きテモテに「信者たちの模範となれ」と命じる（テモテへの手紙一 4:12）。彼の言葉、行い、愛、霊、信仰、清さは、公の説教だけでなく、日常生活のあらゆる事柄において模範となるべきである。そのような模範は、まず内面、すなわち心と精神から始まる。そして、キリスト者としての内なる恵みは、言葉、行い、行動において外に現れなければならない。パウロはテモテへの勧告を次のように結んでいる。「わたしが来るまで、聖書の朗読と教えに専念しなさい。...あなたの中にある賜物を軽んじてはならない。...これらのことを深く考え、それらに心を注ぎなさい。」1テモテ4:13-15

すべてのクリスチャンの召命と忠実さは、「義と真の聖さ」の原則に立脚する（エペソ4:24）。信者は神の御性質を反映するよう招かれている。「あなたがたを召された方が聖なる方であるから、あなたがたも、すべての行いにおいて聖なる者となりなさい」（1ペテロ1:15）。

3月15日のレッスン

他者への与え

キー・ヴァース：「この地には貧しい者が常にいる。だから、貧しい者や困窮している同胞に惜しみなく分け与えよと命じる。」

申命記15:11

聖句抜粋：

申命記 15:4-11

申命記は神の律法全体の要約と評される。ほぼ全編が、神がモーセを通してイスラエル人に与えた戒めと指示を繰り返し述べている。神はイスラエルに律法を、従うべき指示として与えられた。モーセの次の言葉は、神の律法がいわば人生の生き方を示す手引書であることを示している。「主は、これらのすべての定めを私たちに守らせ、私たちの神、主を畏れるように命じられた。それは、私たちの益となり、今日のように私たちを生かしておられるためである。」申命記6:24

神の慈しみを背景に、モーセを通してイスラエルに告げられたのは、もし民が神の命令に従うならば、イスラエルに貧困は決して存在し得ないということである。今回の箇所は申命記の中で礼拝に関する様々な指示に焦点を当てた部分に位置づけられる。前章では動物を清いものと汚れたものに分け、十分の一献金の指示を与えている。次章で

は過越の祭り（ ）やイスラエルの礼拝暦における他の祭りのことが論じられている。

申命記15章は、後にイザヤ書58章6-7節に見られる神の言葉を予示していると見なせる。そこでは神が礼拝に求めるものをこう述べている：「わたしが選ぶ断食とは、悪のきずなを解き、重い荷をほどき、虐げられた者を自由にし、あらゆるくびきを砕くことではないか。 飢えた者にあなたのパンを分け与え、追い出された貧しい者をあなたの家に招き入れ、裸の者を覆い、あなたの肉親から目を背けないことではないか」

この教えは、イスラエル人が神への礼拝として生きるべき道を示している。彼らは七年ごとに安息年を守り、その時には借金を赦さねばならなかった（申命記15:1-3）。彼らは心を解き放ち、手を差し伸べて、困窮する者たちの不足を補うべきであった。（申命記15:7-10）条件は一切設けられなかった。必要があれば、それを満たすべきであった。神の命令を忠実に守るならば、彼らの間には貧しい者は存在しないはずだった。

旧約聖書において、主はイスラエル人に、御自身とその律法への従順と忠誠の報いとして、地上の繁栄を明確に約束された。この約束は、イエスの働きによって起こった時代区分（ディスペンセーション）の変化という事実を認めない者たちにとって、つまずきの石となってきた。多くの者が誤って、この繁栄の約束をクリスチャンに適用し、この誤りが心の混乱を招いてきた。

現世における地上の繁栄は、忠実なクリスチャンに約束されているものではない。ゆえに、使徒ヨ

ハネが教える愛の律法を他者に対して実践しよう。「イエス・キリストは私たちのために命を捨てられた。 私たちも兄弟姉妹のために命を捨てるべきです。もし誰かが物質的な財産を持ちながら、困窮している兄弟姉妹を見て憐れみを示さないなら、どうしてその人に神の愛があると言えるのでしょうか。愛する子供たちよ、言葉や口先だけで愛するのではなく、行動と真実をもって愛しましょう。」ヨハネの手紙一 3:16-18

3月22日のレッスン

キリスト・イエスにあって一つとなる

鍵となる聖句：「ユダヤ人もギリシヤ人もなく、
奴隷も自由人もなく、男も女もありません。あなた
がたはみな、キリスト・イエスにあって一つな
のです。」

ガラテヤ人への手紙 3:28

聖句抜粋：

ガラテヤ人への手紙 3:24-29

イエスが弟子たちを初めて天の御国を宣べ伝えるために遣わされたとき、彼らは「イスラエルの家の中の失われた羊」だけに赴くよう命じられました（マタイ10:5-7）。これは、イスラエルがまだ神の契約の民であったという事実と調和していました。ただし、その状況は間もなく変わるのです。今日の聖句でパウロは、律法の契約を通して導きを求めていたイスラエル人が理解すべきことを説明している。「律法は、私たちをキリストに導く教師でした。それは、私たちが信仰によって義と認められるためです。しかし、信仰が来た後、私たちはもはや教師のもとにはいません。」ガラテヤ人への手紙 3:24,25

今日の鍵となる聖句は、イエスが「すべての人」のための身代金として死なれたため、モーセの律

法の下にあったあらゆる区別が今や取り除かれたというパウロの宣言である（テモテへの手紙一 2:5,6）。その結果、「聞く耳を持つ者」は皆、キリストのもとに来ることができた（マルコによる福音書 4:9）。クリスチャンの神における立場は、今や「新しい創造物」としてのものであった。

（コリント人への第二の手紙5:17）。福音はすべての人に無償で与えられ、神の御目における個人の立場は、キリストの体の一員として認められるのです。「あなたがたがキリストに属するならば、あなたがたはまことにアブラハムの子孫であり、約束による相続人なのです。」ガラテヤ人への手紙3:29

ユダヤ人は、過去に彼らの民族に与えられた恵みが、キリスト教の兄弟愛の中で特権的な立場をもたらすと考えてはならない。同様に、異邦人も、ユダヤ人が民族として律法の契約のもとでの以前の恵みから切り離されたからといって、個々人が主の目に不遇であると考えてはならない。双方とも、神が今後、民族的な差異を無視し、ユダヤ人であれ異邦人であれ、一つの「キリストのからだ」の一員としての忠実さに応じて報いることを知るべきであった。コリント人への第一の手紙 12:12,13

奴隷制度はイスラエルにおいて規制された制度であり、パウロの時代にもなお存在していた。彼は、キリストのからだの一員となった奴隷が主人の意思を無視してよいとは言っていない。むしろ、主は奴隷を、あたかもキリストにある「自由人」であるかのように祝福し得ると述べている。

(コリント人への第一の手紙7:21,22)。ある点では、天の御国に与るために必要な謙遜な性格を身につける上で、主人の立場よりも奴隷の立場の方が有利であった。しかしいずれにせよ、奴隷は、天の希望に関して主が自分の地上の立場を顧みないことを知るべきであった。

ユダヤ人女性は他の古代文化の女性より自由を享受することが多かったが、イスラエルの家父長制の法律は主に家庭内領域に彼女たちを限定し、養育と家庭生活に責任を負わせた。祭司職は彼女たちを排除し、いくつかの顕著な例外を除いて、彼女たちの神殿へのアクセスは制限されていた。パウロは今、これらの家父長制の法律が「キリスト・イエスへの信仰による神の子ら」にはもはや適用されないと宣言する。ガラテヤ人への手紙3:26

私たちはすべての人々に福音を伝える特権を喜びとします。全世界への証しとして「御国の福音」を宣べ伝えるというイエスの大宣教命令に忠実でありましょう。マタイ24:14

3月29日のレッスン

神の王国を待ち望む

鍵となる聖句：「多くの国々から民が集い、こう言うだろう。『さあ、主の山へ、ヤコブの神の家へ登ろう。主は私たちに御自身の道を教え、私たちはその道を進むのだ。主の教えはシオンから発し、その言葉はエルサレムから発するからだ』」

イザヤ書 2:3

聖句抜粋：

イザヤ書 2:2-4

全人類の祝福は聖書の中心的なテーマである。生まれた者すべてが、神の御国の祝福された結果を体験する機会を拒まれることはない。神はまずアブラハムへの約束を通してこれを宣言された：

「わたしは、わたし自身を誓いの証人とする。主は言われる。あなたがこのことを行い、あなたの息子、あなたのひとり子を惜しまなかったから、わたしはあなたを祝福し、あなたの子孫を天の星のように、海の砂のように増やす。...あなたの子孫によって、地上のすべての国民は祝福を受ける。」創世記22:16-18

私たちの鍵となる聖句は、神の約束された王国について預言的に語っており、その律法は「シオンから出る」とされています。旧約聖書において、シオンの山はエルサレムにあり、イスラエルの政府の座として認識されていました。新約聖書は、

これを象徴的な霊的なシオンと対比させています。ここでは、キリストに従う者たちが「」と表現され、「生ける神の都、天のエルサレム」に来ると語られており、これはイザヤのシオンの預言の成就を意味しています。（ヘブル**12:22-24**）使徒ペテロもまた、シオンのイメージを用いて、キリストの足跡をたどる者たちを「生ける石」と表現し、キリストを礎石としてシオンに据えられ、霊的な神殿に組み上げられる者と描いている。こうしてペテロは旧約のシオンと新約の教会とを結びつけるのである。ペテロの手紙一**2:4-6**

イエスは聞く耳を持つすべての人に神の王国を宣べ伝えました（マルコ**1:14**、ルカ**4:43**）。そして彼らにこう招きかけました。「わたしについて来たい者は、自分を捨て、毎日自分の十字架を負い、わたしについて来なさい」。（ルカ**9:23**）。死からの復活からわずか数年で、福音のメッセージはすべての国々に広がり始めた。（使徒**1:8**）。それは特に、シオンの階級の一員となることを望む者たちに明らかにされた。彼らに当てはまる言葉はこうである：「真実な言葉である。もし私たちが彼と共に死んだなら、彼と共に生きるであろう。もし私たちが苦しむなら、彼と共に支配するであろう。」 テモテへの第二の手紙 **2:11,12**

この福音は二千年も宣べ伝えられてきたが、シオンの階級はまだ完成していない。その基準は高く、大多数には魅力的ではない。イエスは「招かれる者は多いが、選ばれる者は少ない」と宣言された（マタイ**22:14**）。したがって、世界は今も神の王国を待ち続けている。しかし、イエスが模範

の祈りの中で語られたように、それは必ず来る。

マタイ**6:10**

ヨハネの黙示録のこの言葉をもって、私たちの学びを締めくくろう。「私は四人の天使が地の四隅に立っているのを見た。彼らは地の四つの風を押さえ、地や海や木々に風を吹かせないようにしていた。すると、東の方角から、いのちのある 神様の印を持つ別の天使が来て、叫んだ。『...われわれの神様のしもべたちの額に印を押すまで、地や海や木々に害を与えてはならない』。私は、印を押された者の数を聞いた。それは十四万四千人であった。」（黙示録**7:1-4**）

奉仕の報い

「人の子は仕えられるためではなく、仕えるため、また多くの人の身代金として自分の命をささげるために来たのである。」

マルコによる福音書 10:45

イエスの宣教は終わりに近づいていた。三年以上もの間、主は弟子たちを召し、教え導いてこられた。弟子たちはついに、イエスこそがメシア、神のすべての約束を受け継ぐ者、メシアの王国を築き、死者と生ける者を含む人類のすべての家族を祝福する方であると認めるに至った。創世記22:18; ガラテヤ3:8

主は特に彼らに、忠実であれば御自身の御座に共に座ると約束された（マタイ19:28）。しかし、御国が霊的なものであり、彼らがその御国に与るには「最初の復活」による「変容」が必要であることを告げてはいなかった。（コリント人への第一の手紙15:51,52；黙示録20:6）また、彼らが御国に与り、御国そのものが人々の間に確立されるまでに、一つの時代が介在するという事実も、まだ彼らに明らかにしていなかった。しかし、彼はこれらすべてをほのめかしていた。彼はこう言われた。「わたしには、あなたがたに言うべきことがまだ多くあるが、あなたがたは今それを負うことができない。しかし、あの方、すなわち真理の御霊が来られたとき、...その方が、これから起こ

ることをあなたがたに告げ知らせるであろう。」
ヨハネ16:12,13

しかしイエスは、弟子たちが完全に打ちのめされ落胆しないように、彼らが必要とし、理解すべき知らせの一部を伝え始めた。エルサレムへ上ることを告げ、多くの苦しみを受け殺されると語った。いつも勇敢なペテロは、この時厳しい叱責を受けた。彼は師を正そうとした。「決して、主よ！ そんなことは起こりません！」 「そんなことがあなたに起こるはずがありません！」 ペテロはイエスがイスラエルのメシアであり、まもなく御国を建てられると信じていた。主が殺されるなど、彼には考えられないことだった。しかしイエスはペテロを叱りつけられた。「サタンよ、私の後ろに下がれ。あなたは私のつまずきの石だ。あなたは神のことではなく、人のことを考えているからだ。」 マタイによる福音書16章21-23節

この同じ教えの中で、イエスは「三日目に復活する」とも述べられた（マタイ16:21）。しかし弟子たちはイエスが死ぬという考えを受け入れられなかったため、この追加の言葉もまた、彼らには主の「難解な言葉」のように思えたに違いない。おそらく彼らは別の機会にイエスが語った言葉も思い出していた。「人の子の肉を食べ、その血を飲まなければ、あなたがたのうちにいのちはない」（ヨハネ6:53）。これもまた彼らが理解できなかった難しい言葉だった。

弟子たちが主の言葉の意味を理解できなかった場面は数多くあった。彼らの期待とはかけ離れているように思えたのだ。彼らの称賛すべき点は、イ

エスに従い続ける十分な信仰を持っていたことだが、主が語られた言葉をどうして理解できたのだろうか。ペンテコステの後になって初めて、彼らは状況とイエスが告げられたことの真意を完全に把握したのである（使徒2:1-4）。そこで聖霊は、神の計画の 新たな側面を明らかにし始めた。すなわち、キリストの苦難（その体である教会を含む）が先に訪れなければ、王国の栄光が明らかにされ、世界への祝福が始まらないという事実である。ペテロの手紙一 1:11

右と左について

別の福音書によれば、ヤコブとヨハネの母が彼らと共に来て願いを述べた。「どうか、この二人の息子を、あなたの御国で、一人はあなたの右に、もう一人は左に座らせてください」（マタイ 20:20,21）。彼らは、御国の栄誉が分配される時が間近に迫っていると信じていたのである。この二人の愛すべき弟子たちが、単なる野心から主の最も近い地位を求めたとは考えなくてよい。むしろ、彼らは主を深く愛していたからこそ、他の弟子たちよりも主の近くにいることをより深く味わえると思ったのだ。実際、十二使徒の大多数よりも近くにいることを許されていた。主は幾度かの特別な機会に、ペテロと共にこの同じヤコブとヨハネを連れて行かれた。彼らは聖なる山で、またヤイロの娘がよみがえった時、ゲッセマネの園でも主と共にいた（マタイ 17:1-5、ルカ 8:41,42,49-56、マルコ 14:32-34）。彼らは主が深く愛された忠実な弟子たちであった。

イエスの言葉を注意深く見よう。主は、御国には重要な地位があるが、それは御自身ではなく父によって与えられると宣言された。「わたしの右と左に座することは、わたしが与えることではない。わたしの父が備えられた者たちに、それが与えられるのである。」（マタイ20:23）

父なる神は絶対的な正義と義の代表者としておられます。千年王国の天上の段階における地位は、その形態がどうであれ、単なる寵愛によって与えられるのではなく、忠実さと資格に基づいて与えられ、すべては恵みによるのです（エペソ2:8）。主イエスご自身が最も高い地位を占められるのは、ご自身がそれにふさわしい方だからです。

「屠られた小羊は、力と富と知恵と力と誉れと栄光と祝福を受けるにふさわしい。」（黙示録5:12）。確かに、父は私たちの主に栄光と大きな誉れを与え、御自身の右の座に高く上げられました。御国の栄光の頂点は、キリストの体である教会が完成し、すべての「召され、選ばれ、忠実な者」が約束された「いのちの冠」を受けるときに訪れます。（黙示録17:14; 2:10）

ここでいう王国とは

何世紀にもわたり、キリスト教徒の間では、イエスや使徒たちが頻繁に言及したメシアの王国について混乱が蔓延してきた。しかし、当初は混乱はなく、イエスの時代から約200年間も混乱はなかった。初期教会は、メシアが二度目に来られるという約束を十分に理解していた。彼は教会を栄光のうちに迎え入れ、世界の支配と万物を神の御心に従わせるための神の力の王国を確立する。そして

彼らは、このメシアの王国がその使命を果たすのに千年の時を要することを知っていた。ヨハネ 14:2,3; マタイ 25:31; 黙示録 20:6

しかし次第に、地上の教会がメシアの王国として組織化され、イエスの再臨前に世界を征服するという理論が生まれた。この非聖書的な見解は教会史の全流れを変えた。もはや福音宣教は、「小さな群れ」を呼び集め、耳を傾け心を開く者たちを完成させ、彼らを王国の栄光に備えることを目的としなくなった。(ルカ 12:32)。むしろその方向性は劇的に転換した。以後、教会は世俗的権力の掌握を目指すようになった。陰謀が企てられ、虚偽の主張がなされ、王や国家を支配下に置こうとする試みが繰り返された。迫害が利用され、可能な限り世俗の支配者たちを誘惑し脅迫して、教会による世界支配の確立を図ったのである。

一時、これらの企ては繁栄したが、十九世紀初頭以降、教会による地球支配の思想はほぼ消滅した。その結果生じた混乱の中で、多くの人々はメシアの王国への信仰を完全に失い、キリストの再臨を待ち望む者はほとんどいない。困惑の中、ある者は霊的王国を単に信者の心の中に宿るものとして論じる。またある者は、キリストの王国が今や世界の主要な政府に体現されていると信じる。しかし、メシアの王国の特定の部分が、同じ王国の他の部分と戦争したり破壊したりする可能性のある大軍を築いている理由を考えると、彼らはさらに混乱する。

こうした混乱の結果、多くの名ばかりのクリスチャンにとって、聖書の教えは単に一貫性や論理性

を欠いているように映る。そうでなければ、ヤコブやヨハネ、その他の使徒たちが統治する王国が存在しなければ「十二の玉座」に着くことはできないと理解するはずだ（マタイ 19:28）。また、主の祈り「御国が来ますように。天におけるごとく、地においても御心がなされますように」（マタイ 6:10）。神の救いの計画をより深く知り理解しようとするなら、私たちは聖書を畏敬の念をもって学び、日々「聖書を調べ」続けねばなりません。（ヨハネ 5:39、使徒 17:11）。そうすることで、私たちは大きな祝福を受け、メシアの栄光の王国が、まだ地上に確立されていないにもかかわらず、「近く、まさに戸口にある」ことを悟るでしょう。マタイ 24:33

「できるか」

御国において主のすぐそばの特別な位置を求められた二人の愛する弟子とその母に、イエスは天の御国におけるいかなる地位も特定の条件を満たす必要があると明らかにされました。弟子として召されただけでは不十分でした。主に従うためにすべてを捨てたこと、主と共に過ごし、教えを学び、それに同意したことだけでは不十分だったのです。それ以上の何かがなければ、彼らは御国の霊的な段階に入ることができないかもしれない。

主はこの条件を宣言し、こう言われた。「わたしが飲む杯を飲むことができ、わたしが受けるバプテスマを受けることができるか」（マタイ 20:22）。これは何を意味するのか？イエスが言及した「杯」と「バプテスマ」とは何か？それはイ

イエス自身だけでなく、忠実な従者となる者たちにも適用されると言われたが、その重要性とは？

我々はこう答える。イエスの「杯」とは、彼が別の箇所と言及した「わたしの父がわたしに与えられた杯を、わたしが飲まないはずがあるか」

(ヨハネ 18:11) という杯のことである。神の計画において、世界の祝福のためにメシア的王国の栄光と誉れと力を委ねられる者は、まずその誉れと栄光に値する忠実さを示さねばならないと、神は既に定められていた。イエスご自身の場合、この杯とは、地上での三年の半ばにわたる宣教期間中に忠実に耐え忍んだ、奉仕、辱め、恥、犠牲、苦難といったあらゆる経験の総体を意味した。そしてカルバリの丘で「成し遂げられた」と叫ばれた時、彼はそれらを完全に成し遂げたのである (ヨハネ19:30)。

キリストの弟子として、私たちは主が示された模範に従い、主が経験されたのと同様の試練を通らねばなりません。主の足跡をたどり、苦しみと犠牲と奉仕において忠実さを示して初めて、主の御国における栄光と誉れと力において主と共に相続人となることに成功するのです。ローマ8:17; IIテモテ2:11,12

イエスが「わたしが受けるバプテスマ」について語られたとき、それは犠牲的な死へのバプテスマを指していました。彼はその後間もなく再びこう語りました。「わたしには受けるべきバプテスマがある。それが終わるまで、わたしはどれほど苦しんでいることか！」 (ルカ12:50)。主の宣教開始時の水による洗礼は、真の洗礼の単なる象徴に

過ぎなかった。水に沈み、水に葬られ、水から上がることは、犠牲的な死へと沈み、そこから復活することを表していた。死への真の洗礼は、ヨルダン川からカルバリまで、三年半にわたって進化した。十字架上で「成し遂げられた」と叫ばれた時、主は死への洗礼が完了したことを意味された。主は三日目（ ）に父の力強い御力によって、その死の洗礼の状態から引き上げられ、右の座に着かれた。この地位は永遠に保たれる。エペソ1:19-22; コロサイ3:1; ヘブル1:1-3

これがイエスのバプテスマであった。それはこの世のあらゆる権利を完全に放棄することを意味した。今、彼は愛する弟子たちに問うた。彼らがこの程度まで従う覚悟と意志があるかどうかを——すなわち、奉仕と犠牲と苦難の杯を分かち合い、死へのバプテスマに与る覚悟があるかどうかを（ローマ6:3-5）。ただ忠実に彼に従うことによつてのみ、彼らは天の御国に与る希望を持つことができた。この原則はイエスに従うすべての者に当てはまる。彼の杯を飲むか否か、死へのバプテスマに与るか否かは、私たち一人ひとりが決断すべきことである。謙遜で自己犠牲的な者だけが、そのような経験に入る能力と意志を持つだろう。

前述の考えを、多くの人々が抱く王国観に当てはめてみると、次のような疑問が適切に浮かび上がる。そうした考え方は、この世の様々な王国に当てはまるだろうか？この世の指導者たちが統治する前に、キリストの死に至る苦しみと犠牲に与る必要があるだろうか？キリストの教会と呼ばれる地上の組織に属するには、大きな困難を伴うのだ

ろうか？そこに入るには自己否定が必要だろうか？ 彼ら全員が洗礼によってキリストと共に「葬られる」のか—すなわち彼の死へと？彼らは皆、彼の苦しみに与るのか？決してそうではない！天の王国に対する正しい見解のみが、これらの様々な主張と整合する。我々は、それが「高価な真珠」であり、それを得るためには他の全てを犠牲にしなければならないと悟らねばならない。マタイ13:46

「私たちはできる」

この出来事の記述において、弟子たちはイエスに「私たちはできる」と答えました。つまり、彼らは主の杯を飲み、主のバプテスマにあずかることを進んで引き受ける意思があったのです（マタイ20:22）。彼らはその意味を明確に理解していなかったが、イエスが命じることは何でもできるし、喜んで行う覚悟があった。このように、あの忠実な弟子たちのように「大いなる勝利者」となり、贖い主と共に、その「からだ」である教会に約束された栄光、誉れ、不死を分かち合う者たちすべてが、そうあるべきである。ローマ8:37; 2:7; 1コリント12:27

検討中の記述において、イエスは弟子たちにこう答えられた。「あなたがたは、わたしの飲む杯を確かに飲むであろう。また、わたしが受けるバプテスマでバプテスマを受けるであろう」（マタイ20:23）。主が弟子たちに合理的に求められるのは、彼らの側におけるその意志だけである。私たちには、イエスが持たれた力と能力は誰一人として備わっていない。私たちは本質的に罪人であ

る。イエスは「聖く、罪がなく、汚れがなく、罪人から離れておられる方」（ヘブル7:26）であった。ゆえに私たちにできるのは、正しいことを行おうとする意志を委ねることだけである。主は私たちを御自身の御手の中に迎え入れ、苦難と経験の学校へと導かれる。そして死に至るまで忠実さを証明するために必要な教訓を与えてくださる。墮落した人類の一員としての私たちの弱さゆえに、神が救い主において「憐れみ深く、誠実な大祭司」を備えてくださったとは、なんと恵み深いことでしょうか（ヘブル2:17）。こうして、イエスを通してのみ、私たちは天の御国に到達することを望み得るのです。

大いなるしもべ—最も尊ばれる者

他の使徒たちは、ヤコブとヨハネが母と共にそのような願い事をしたことに憤慨した（マタイ20:24）。しかしこの出来事は、メシアの王国における偉大さの基準となる指針を、イエスが示す機会となった。謙遜と愛をもって最も多く他者に仕える者は、それによって神に対してより高い地位にふさわしいことを示しているのだ。（ガラテヤ5:13）これは、イエスが言うように、通常の世界のやり方とは異なる。世の支配とは、他者に仕えることではなく、仕えられることであるからだ。（ルカ22:25,26）

御国の原則は、最も多く仕える者が最高の栄誉を得るというものである。イエスご自身が、あらゆる者の中で卓越したしもべであられる。ゆえに、神の定めにより、御国においてイエスの地位は最も高く、他の者たちは、愛と奉仕と従順と忠誠と

いうイエスの御霊をどの程度備えているかに比例して、イエスの次に位置づけられる。主は弟子たちにこう言われた。「わたしに仕えたいと思う者は、わたしに従いなさい。わたしのしもべは、わたしがいるところになければならない。そして、わたしに仕える者を、父は尊くしてくださる。」ヨハネ**12:26**